

「台湾スタディーズ」としての地域国際芸術祭

文筆家 栖来ひかり

ここ数年、台湾の「地域型」国際芸術祭が盛り上がりを見せている。地域型の国際芸術祭といえば、日本で1994年より始まった新潟県・越後妻有の《大地の芸術祭》や、《瀬戸内国際芸術祭》(2010年～)がよく知られる。では、台湾でこうしたスタイルの国際芸術祭といえるものが開催され始めたのはいつだろうか。

2013年に桃園県(現・桃園市)で開催された《2013桃園ランドスケープ芸術祭》がそれにあたる。世界でもっともため池の密度が高い地域としても知られる桃園独特の風景を活かした巨大な黄色いアヒルの人形といえば思い出す方も多いのではないだろうか。オランダのアーティスト、フロレンティン・ホフマンのつくるアヒルの人形《ラバー・ダック》は、2009年には大阪でも展示されるなど世界中の芸術祭で引っ張りだこだった。そのほか、水玉模様のかぼちゃでお馴染みの草間彌生や、韓国のチェ・ジョンファ(崔正化)の蓮の花の作品など、国際的なアーティスト作品と桃園のため池というインパクトあるビジュアルが話題となり、16日間という短い期間にもかかわらず240万人以上の参観者をあつめ、10億元を超える経済効果があったといわれる。そもそも《瀬戸内国際芸術祭》も台湾人観光客に大変人気を博す催しだ。そうした地域の景観や特性を利用したアートイベントに馴染みがあったところに、台湾で利用率の高いSNSのFacebookなどでシェア・拡散されたのが成功の理由だったかもしれない。いわゆる「インスタ映え」という言葉のはしりだ。また、特に2000年代以降に盛り上がってきた“台湾人アイデンティティー”に呼応し、これまで海外に目を向けてきた台湾の人々が、あらためて身

の回りの風景や環境に向き合ってきた流れにも沿う。

2017年に蔡英文政権が発足して以降は、地域創生や文化方面に力を入れる政権の後押しもあり、より大きな規模で深いテーマの地域的なアートや文化イベントが開催されるようになった。特に、2014年のひまわり学生運動への参加を通して自分の足元の重要性に気づいた若者世代は、それぞれ自分たちの故郷にUターンしたり魅力を感じた地域に移住したりして、ローカルコミュニティを基礎にした地域活性化に取り組んでいる。

また、蔡英文政権が推進する「移行期正義」の要素も、現代の台湾アートや芸術祭に大きな影響を与えている。「移行期正義」(Transitional Justice、台湾では「轉型正義」)は、台湾において国民党政府の独裁体制下に行われた不正義を追及するために使われることが多く、戦後の国民党統治下における白色テロの政治犯が収容された離島・緑島での地域芸術祭《緑島人権芸術祭》も2019年よりはじまっている。しかしそもそも、移行期正義とは国家や組織による人権侵害の過去と向き合い、加害者と被害者の双方が共に暮らす社会の和解を目指す試みをいうことを前提とすれば、対象は国民党時代に限ったこととは言えないであろう。台湾現代アートの世界でも、白色テロにおける人権問題のみならず、日本統治や更にその前の、中国大陆から移住した人々が台湾原住民族(先住民)と生活領域や経済について争ってきた、または移民同士が闘争してきた歴史にまで踏み込んでいる。ここ最近、とくに深化している台湾の地域芸術祭の背景には、以上のような社会的な脈絡がある。

「元戦地」のアートビエンナーレ

中華人民共和国に対する中華民国(台湾)の“最前線”として1949年から1992年まで軍事管制が敷かれてきた馬祖諸島では、2022年にはじめてアートビエンナーレ《第一回馬祖国際芸術島》(2022年2月12日～4月10日)が開催された(本来は2021年に開催予定だったが、コロナ禍のため翌年に延期となった)。この芸術祭を支えているのは、集落の景観や文化資産を保存する30年におよぶ文化運動で、1990年代より島外の専門家と住民とが協働し進めてきた。例えば、馬祖列島のなかの一つの島、東莒島にある大浦地区の伝統的閩東式の石づくりの集落は文化資産として登録されている一方で、過疎化がひどく一時は無人の集落となった。しかし、この島の備える独特の文化と美しさに惹かれたアーティストらが移住し、「大浦plus」という地域再生運動が芽吹いたのである。

このように、民間における活発な議論や行動がもたらす地域への活力が芸術祭開催のモチベーションとなっている一方で、中国からの圧力が強まり国際的な注目が台湾に集まる現在、中国大陸に非常に近く、長年にわたって国民党の地盤でもある馬祖において、文化的にスポットを当てることで台湾本土との結びつきを強める政治的な意図もあるように推察される。

《馬祖国際芸術島》は、飲食・生態・信仰・祭りなど馬祖独特の風土文化が織りなす風光明媚な《瀬戸内国際芸術祭》型のビエンナーレだが、そこに強烈な陰影をもたらすのが戦地遺構だ。台湾男性の多くに課せられている兵役において、かつて馬祖と金門へ配属が決まることは「金馬奨を獲った」と揶揄されるほどの試練として知られた。厳格な規律と苛酷な環境のなか、いつ敵が襲ってくるかもしれぬ恐怖に晒され、限られた物資のなかで訓練や作業は常に死と隣り合わせであり、自殺したり精神を病んだりする人も少なくなかった。実際、軍事拠点の暗闇に設置された作品を観て筆舌に尽くしがたい昔の兵役経験を思い出し、涙を流した参観者もいたという。セックスワーカーをテーマにした常設展のある「梅石軍官及士

官特約茶室」入り口の橋には、横浜トリエンナーレ2020でも展示されたジョイス・ホーの揺れる鉄柵の作品「balancing・アクト」が設置された。特約茶室は「軍中楽園」とも呼ばれ、軍事施設内で、女性の性的サービスが売買される複合的な娯楽施設である。日本の遊郭における大門を連想させる橋のたもとで前後に揺れる鉄柵は、茶室から出られない女性たちと島内から出る事の叶わない兵隊たちという複雑な関係性の交錯を感じさせる。軍事基地のある島において、軍は搾取者であると同時に経済循環をもたらし、島の伝統文化を担う(例えば毎年旧正月15日に行われる馬祖を代表する祭り“擺暝”のパレードは軍の若者らも演者として参加する)協力者でもあり、二項対立で語ることはできない。しかし、ひとつの後遺症として、住民が自らの土地の歴史や風土を知りローカルアイデンティティを育む主体的な行動や意志が、長期的に奪われてきたことの歪み〔ひずみ〕を芸術祭は露わにする。具体的にいえば、東莒島のとある非常に美しい入り江は、地域住民から長いあいだ忌避されてきた場所であった。かつては“水鬼”(敵の潜水兵)が上がってくる危険性があったし、事故や病気によりこの島で命を落とした兵士を火葬する施設もあった。また島の軍事管制が解かれて以降、入り江は密貿易の場所ともなり、島の子供たちは絶対にここに近づいてはいけないと厳しく言いつけられて育った。芸術祭ではこの入り江も作品設置会場のひとつとなり、アーティストは住人たちと共に、海のごみを再利用した色とりどりの紐を編み込んだ美しいスツールをつくり、浜辺の波打ち際をパブリックな広場に見立ていくつも設置した。こうした活動のひとつひとつに、住人たちの手に島が還っていくことへの願いが込められている。

河川が主役となった芸術祭

2022年10月15日～2023年01月29日に第一回が開催された《2022Mattaaw 麻豆大地トリエンナーレ：曾文溪の千個のなまえ》は、台湾最大の曾文ダムを擁し、嘉義県と台南市とのふたつの自治体にまたがって流れる河川・曾文溪を主役として始まった芸術祭である。日本統治時代の製糖工

場跡地をリノベーションした「総爺アートセンター」はじめ、3か所の主要会場や国道沿いの旧鉄道橋跡で9つのプロジェクトが企画され、約60件の作品が展示された。

台南市では、2024年に迎える建城400年を前に、オランダ統治時代の城址の“安平古堡”が建城当時の“熱蘭遮城（ゼーランディア城/Fort Zeelandia）”に改称された。台南は特に“台湾意識”が強いと言われる土地柄でもある。そんな台南で行われるアートトリエンナーレが地元最大の河川の名に焦点をあてたことは、台湾における“名前”と“アイデンティティー”をめぐる経緯を考えるうえでも興味深い。“名前”は台湾において、ここ30年とりわけ重要視されてきた。1987年の戒厳令解除前後よりはじまった緩やかな民主化と共に、原住民族の「正名運動」¹をはじめ、度重なる植民統治を超え台湾という土地に主体的に関わり権利とアイデンティティーを確立するための手始めとして実施されたのが改称である。国民党以外から初の総統となった陳水扁はとりわけここに力を注ぎ、国民党の一元独裁体制のもと中華民国の歴史観を反映した空港や道路、広場の名称を変えたことは象徴的だ。

また、この芸術祭では100回に及ぶワークショップも行われたが、中でも注目したいのが、地方自治体や水利局の職員、企業、農民など曾文溪の異なるステークホルダーが各自、苔・動物・洪水・堆積土・ダムといった非人類の視点から曾文溪をひとつの共同体と目して話し合いを行う「万物会議」のワークショップである。ニュージーランドでは2017年に、先住民マオリの崇拝する河川の“法的人格”が世界で初めて認められたが、こうした動きは、近代社会で周辺化された人々の視点や尊厳を見直し環境問題に向き合う世界的潮流でもある。

統括キュレーターである龔卓軍は3年におよぶ芸術祭の準備期間に、全長138.47キロに及ぶ河川、曾文溪を踏査によってリサーチした。踏査によって、流域の各集落において曾文溪は一本の河川と見做されておらず、「曾文溪」と呼ばれて来なかったこと、またそれまでチームが抱いていたものと異なる次元の様々な河川の姿が浮かび上が

る。

原住民族ツォウ族の猟師の案内で上流のフィールドワークを重ねたキュレーターチームは、消失の危機にさらされているツォウの言葉や生活の知恵、伝統的な技能に触れ、彼らが非常に優れた森林や生態の観察者であること、そこには台湾社会の中心にいる漢民族とは全く異なる環境保護への考え方があることを学んだという。嘉義県に源流をもち台南市から海に出る曾文溪は大まかに3つのエリアに分けられる。台湾中央山脈の阿里山に連なる上流はツォウの伝統領域であり、戦後に作られた台湾最大のダム“曾文ダム”をはじめいくつもの水利施設を抱える。そこから中流の平埔原住民族²のシラヤやタイボアンの文化が残る古い農村集落を経て、下流には魚の養殖場や市街地と共に、台湾経済ひいては世界のハイテク産業を支える半導体工場が集まる。

また、ツォウの伝統領域では流域のポイントに応じて「yamoezung（イチジクの沢山実る地）」「hiouana（虹の地）」「nsoana（獣の泉）」「kualians（フクロウの地）」「yatisau（伝染病侵入を防ぐ結界）」などと呼ばれ、最終的に採集された呼称は千を上回った。「曾文溪の千個のなまえ」という副題の所以だが、これは流域の共同体ごとに河川との関わりが多様かつ異なる記憶や問題を孕むことを示す。

多くの文化を生み暮らしを潤す反面、絶えず洪水や氾濫と堆積を繰り返してきた河川。近年では2009年のモーラコット台風による「八八水害」はじめ、台風で削られた山林の土砂は流域およびダムに堆積し、貯水能力を奪っている。これらの問題は、山地から海までの距離が短く河川による水害を多く抱えてきた日本でも同様である。またここ数年、降雨パターンが不安定化している台湾中南部では渇水が起りやすく、チップの洗浄に大量の水を使う半導体産業が優先され、農地への灌漑が一時的に停止されるなどの問題も顕在化した。

治水の努力が地域環境を破壊している現状もある。写真家でアーティストである沈昭良の共同キュレーションによる「潜行撮影プロジェクト」では、14名の写真家が曾文溪のあらゆる姿を空

撮や踏査によって写真に収めた。圧巻だったのは、記録的な渇水の起こった2021年に撮影された、上流の自然に摩耗された大型砂防である。巨大な怪物のようなこの人工物が、時間と自然の力による侘びた美しささえ漂わず一方、ツォウの獵師はこうした巨大砂防ダムが魚や動物の往来を阻んで生態系を壊すのみならず、堰き止めた土砂が左右の岸に堆積し絶えず浸食して山壁の崩壊が進んでいると指摘する。砂防ダムのデメリットや治水の在り方もまた、アメリカなど世界的に議論が高まっている事柄だ。

もうひとつ、台湾における芸術祭では、日本との歴史的な関わりが作品づくりやプロジェクト企画の重要な要素となっていることは少なくない。例えばこの麻豆大地トリエンナーレにおいて主役となった曾文溪は、日本の米不足を解消するため食糧庫の役割を与えられた植民地台湾において建設された嘉南大圳や烏山頭ダムの水源である。また、それらの建設により飛躍的に砂糖や米の精算があがった地域でそれらを運ぶための鉄道が整備され、現在の台南の産業インフラの基礎となっている。芸術祭のメインビジュアルも、パノラマ俯瞰図の第一人者である吉田初三郎の弟子で、台湾各地の俯瞰地図を残した日本統治時代の絵師・金子常光のスタイルを踏襲した。ここにも一本の河川に堆積した重層的な歴史を俯瞰し多様なアイデンティティの共存する“共同体”として読み直そうとする意欲が表れている。

客家文化を取り上げた芸術祭

台湾5縣市、150キロに跨る台湾最大の芸術祭が《ロマンチック台三線芸術祭》だ。台三線とは台北を起点に、最南端の屏東県まで台湾西部の丘陵と台地を走る全長436.286キロの道路だが、中でも客家〔ハッカ〕の人々が多く暮らす桃園・新竹・苗栗といった西北部はロマンチック台三線と呼ばれ、これは現・蔡英文政権が2017年より取り組む「客家文化復興〔ルネサンス〕」の一環でもある。客家は現在の中国広東省東部や福建省西部から長い時間をかけて世界中に広がった民族で、台湾の主要なエスニック集団のひとつであり、台湾人口の約10%を占める。清朝時代に台湾に

移民してきた客家は独自の言葉と生活文化を守り伝え、地域によって7種類の方言がある。結束が強く、多くの実業家や政治家を輩出し、現大統領の蔡英文も客家ルーツをもっている。

第1回目は2019年に行われ、2回目が今年の6月24日から8月27日まで開催された。参加したのは国内外55組のアーティスト、そして21組のデザインチーム、作品やプロジェクトは全部で91ある。

しかし、客家とははなにかを説明するのは少々難しい。質実剛健、儉約といった客家精神がよくいわれるが、客家の「客」とは、客家が流浪していった先にもともと住んでいた人々が“よそ者”という意味でつけた他者視点の名称であり“蔑称”でもあった。また台湾客家のシンボルといえば、アブラギリの花や「客家花布」と呼ばれる原色の派手な花柄の布があるが、どちらも元々は特に客家のものという訳でなく、ここ数十年で後付けされたイメージだ。加えて、親が客家人でも子供は客家語を話せない家庭は多く、台湾の「客家」は消失の危機にある。そこで近年では、客家ルーツを持つ人々が「自分は客家である」と自覚する、つまり自分の“客家アイデンティティ”を再認識し、ネガティブなイメージを塗り替えるための動きが活発となっている。つまりこの芸術祭も、「客家とは一体なんなのか？」を住人とアーティストが協働して生活文化のなかに探る一方で、来訪者らが作品と対話することで多様なありかたで客家を認識していく実践といえそうだ。

ちなみに、今年のテーマは《花啦嘩啾〔ファラビボ〕》、客家の言葉で「彩りが多く美しい」を意味するが、かつては誰かの“派手な”様子を腐すネガティブな言葉でもあった。こうした負の言葉を敢えてテーマとして取り上げることにより、客家にまつわるイメージを多様な形で読み解き、肯定的に定義しなおそうとするラディカルな試みが読みとれる。

芸術祭における重要な鑑賞地点のひとつが、苗栗県の公館郷にある台湾中油事業所だ。かつて罪を犯して清朝政府より逃亡していた漢人男性が、この地域の客家村や原住民族の村を行き来しているうちに公館郷の山あいでも原油を発見し、小さな

山村はアジアで最初、世界で二番目の油田となった。日本統治下で最新型の油田採掘設備が整えられた公館の油田は1927年に歴史的な産出量を記録するが、その後に原油が枯渇してしまう。戦後には中華民国の国営企業「台湾中油」が事業を引き継ぎ新たな原油層を発見、現在も稼働をつづける世界最古の油田である。また石油産業と並んで、かつての台湾で大きな輸出産品であり、医薬品やセルロイドの原料であった「樟脳」にもスポットが当てられた。日本統治時代に最も盛んになった樟脳産業において、公館近辺で伐採されたクスノキは台三線にて大溪に集められ、川を伝って台北の工場で樟脳として精製され、世界各地に運ばれて外貨と変わった。樟脳は医薬品や防虫剤のほかセルロイドの原料としても重宝されたが、そのための木材伐採に関わった多くが客家の人々であった。

遅れて台湾へと移民し、すでにホーロー人たちが開拓した肥沃な平地と、山間部に暮らす原住民族とのあいだの丘陵地を開拓した客家は、かつて戦乱を避けながら数十代にも渡って流浪し住処を求めてきたこともあり、痩せた傾斜地で暮らす知恵や術〔すべ〕と強靱な精神を備える。また一説には、客家は中国南部の少数民族にもルーツを持ち、山間での暮らしに慣れていたともいう。更にそこに各エスニック集団同士の戦い（械闘〔かいとう〕）の問題が加わる。元々の土地に住んでいたサイシャット族、タイヤル族と土地や水利をめぐって争い、その土地を奪うこともあったろう。もともと台三線とは、高地に住む原住民族と漢人らとの生活領域のあいだに設けられた境界（土牛界線/隘勇線）でもあった。これら地域に眠る傷をアートで縫い合わせ、多様な集団の融合と和解を目指し未来について考えることも、この芸術祭の目指すところだ。テーマ「ファラビボ」とは、台湾の歴史文化的なキーワードと何らかの形で関係する人々を芸術祭のもとグローバルに巻き込んだカルチュラル・スタディーズ、つまりアートを通した「台湾スタディーズ」の一環なのだと思う。

公館の台湾中油事業所近くに今年竣工した文化施設「客家文学花園」の室内展示では、このロマンチック三台線に残る戦争の記憶がテーマとなっ

た。乙未〔いっぴ〕戦争は、日本では「台湾平定」とも呼ばれる。日清講和条約により台湾を接收した日本軍の上陸に際し、清朝から台湾に派遣されていた官僚、そして台湾商人らは「台湾民主国」という独立国の建国を宣言した。それに対し日本軍が無差別殺戮をしながら進軍したことで、台湾各地では激しい「郷土防衛戦」が起こり、これを日本軍が武力鎮圧した。この日本軍の進軍ルートがちょうど現在の台三線と重なるのである。ホーロー人や原住民族などエスニック集団を問わずに「台湾民主国軍」として日本軍に抵抗したなかでも、とりわけ多く義勇軍に参加したのが客家の人々であった。芸術祭を主催する客家委員会の主任委員（内閣大臣にあたる）楊長鎮のオフィスを訪問したとき特に印象的だったのが、壁一面を覆う大きな「藍地黄虎旗」で、楊氏が着任したとき特別に制作・設置したものだ。大きく身体をくねらせ黄色の虎と青い地のコントラストが迫力のあるこの旗は、かつて日本軍の領台に抗った人々が打ち立てた「台湾民主国国旗」だ。台湾民主国は清朝派遣の官僚によるその場しのぎの政治的戦略だったともいわれるが、最近では台湾においてエスニシティを問わず“郷土を守るために外敵と戦”った台湾アイデンティティの芽生えとして、再評価されてもいる。2009年に苗栗県の県知事選に立候補もした楊長鎮は、台湾茶の黄金時代を築いた一家の栄枯盛衰を描き大人気となったドラマ（舞台は客家の多い新竹北埔）『茶金——ゴールドリーフ』のプロデューサーでもあり、オフィスの旗に込められた「自分の根源を忘れない」という決意が見て取れる。台湾における歴史文化と政治がいかにかけても切り離せないものでもあるかを感じる。

台湾現代アートのもつ「修復」的作用

日本大学文理学部教授の三澤真美恵は、台湾の政治研究者・吳叡人が挙げた移行期正義の要素を提示したうえで、そこには歴史的真相を究明し加害者に責任をとらせる「応報的正義」と、被害者の苦しみを回復させ、和解をもたらし、悲劇を繰り返さないよう人権と民主主義の価値を教育する「修復的正義」という二種類の概念があると指摘

する³。今の台湾における現代アートには後者(修復的正義)の性格を持つものが少なくなく、「修復」という概念は台湾の現在の文化動向において極めて重要な意味をもっている。

そうした意味で、改めて2008年の魏徳聖監督『海角七號(日本語タイトル:海角七号 君想う、国境の南)』をみてみよう。この映画が描いたのは、日本統治時代に生きた台湾の人々が抑えつけざるをえなかった、置き去りにされてきた記憶への慕わしさであった。それは同時に、現代の台湾人にとって、たび重なる植民の歴史という癒えない“かさぶた”をもう一度引き剥がし、傷を異なるかたちで「修復」しようとする文化的な試みであるように思える。

また、社会現象を巻き起こした空撮ドキュメンタリー映画『看見台湾(日本語タイトル:天空からの招待状)』の公開されたのが、台湾初の地域芸術祭である「2013桃園ランドスケープ芸術祭(桃園地景藝術節)」と同じく2013年であったことにも注目したい。『看見台湾』は、「かけがえない台湾という土地」という認識と土地への連帯をエスニシティの壁を越えてもたらし、また環境破壊の問題を残酷なまでに明らかにした。これもまた、分断された社会への、そして自然環境というベクトルの「修復」的な作用をもつものであった。

確立されていく独自性

以上のようなことから、台湾における芸術祭の意義と原動力を改めて考えてみたい。

“ひとつひとつの形態が、他者のもっとも大きな寛容性への寄与となるような、そのような形態のもとで多様性が自らを実現することである(『人種と歴史/人種と文化』)”¹ というのは文化人類学者、レヴィ・ストロースの言葉であるが、台湾という多様な存在が自らを実現するために、アーティストやコミュニティが協働して「ひとつひとつの形態」——“台湾スタディーズ”を進めていく、そうした状況が昨今の台湾におけるアートや

地域活性化、社会文化のあり方において見て取ることが出来る。

そうしてそれは、我々の心の動きのスピードを超え、どんどん未来を崩し壊していく文明への不安、さらには、その後を追いかけて破壊がもたらした傷口を何とか修復しようとする人間の、生活への愛着と理性、想像力と実践への理想的なかたちでの信頼ではないかと、ここ数年の台湾の芸術祭を見ながら考えさせられる。台湾には、暗い過去と連帯していこうという気概が確かにある。

2023年の《ロマンチック台三線芸術祭》には、国際的に活躍する日本人キュレーターで、金沢21世紀美術館館長の長谷川祐子も視察に訪れた。これは長谷川が総合キュレーターを務める、岡山県北部を中心とする12の市町村で2024年秋より開催される国際芸術祭《森の芸術祭 晴れの国・岡山》のリサーチも兼ねていたという。地域型の国際芸術祭という、自治体が大きく関わるアートのあり方は日本のほうが先行してきたにも拘らず、今回は日本から台湾へと視察が行われたことは、台湾の芸術祭がすでに独自の価値を確立したことの証左でもあり、大きな意義をもつだろう。台湾の地域国際芸術祭が始まって今年でちょうど10年。今後どのように展開していくのか、心より期待したい。

1 台湾の先住民は度重なる植民支配や外来移民による統治のなかで「蕃人/番人/高砂族」/山地同胞などと呼ばれ差別や偏見を含むものであった。「正名運動」は、当事者たちが自らの呼称と決めた「台湾原住民族」と憲法に明記すること、また漢化された氏名を元の民族名で戸籍登録できることなどを要求し、先住民としての尊厳を取り戻すものである。

2 (平地に暮らすという意)

3 現代台湾「慰安婦」表象に関する一考察——ドキュメンタリー映画『阿媽の秘密』『草の歌』を中心に/三澤真美恵

https://www.jstage.jst.go.jp/article/nichidaichubun/2022/19/2022_5_pdf/-char/ja

桃園地景藝術季

<https://www.taoyuanlandart.com.tw/>

馬祖國際藝術島

<https://matsubiennial.tw/>

2022Matauw 麻豆大地藝術季

<https://m.facebook.com/2022matauwtriennial/>

浪漫台三線藝術季

<https://www.romantic3.tw/>